



Title	名づけの変遷 人名用漢字と読みの相関に注目して
Author(s)	平山, 亜紀
Citation	文化環境研究, 5, pp.38-46; 2011
Issue Date	2011-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/28705">http://hdl.handle.net/10069/28705</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-01-19T10:49:03Z

---

# 名づけの変遷

---

## 人名用漢字と読みの相関に注目して

---

平山亜紀

### 1. はじめに

近年、「侍亮」と書いて「サスケ」、「奏楽」と書いて「ソラ」、「明格」と書いて「ミント」と読むような、個性的な名前を持つ子どもが増加してきている<sup>1</sup>。

子どもの名づけに関する研究は、従来、使用される漢字や名づけの傾向・理由の史的変遷を中心になされてきた（円満字2005、牧野2003など）。また、本研究で取り上げる個性的な名前については、新聞等に掲載された新生児名からその増加を指摘する研究はあるものの（佐藤2007）、それらの名前をなぜ個性的と感じるのかについての研究は未だなされていない。

そのため、本研究では、名づけに使用される漢字とその読みに注目して、個性的な名づけが行われるようになった変化がいつ頃から始まったのか、また、近年、個性的な名前が増加していると感じる要因はどこにあるのか、という2点を明らかにすることを目的とする。

個性的な名前が増加していると感じる要因としては、①名づけに使用される漢字そのものが以前とは異なる（＝漢字の字種の変化）、②名づけに使用される漢字に対する読みが多様化している（＝漢字の読みの多様化）、③名づけに使用される漢字同士の結びつきが変化している（＝漢字の結びつきの変化）、④名前の「音」に対する漢字表記の種類が多様化している（＝漢字表記の多様化）、などが考えられる。本研究においては、これらの考え得る要因の一つ一つについて考察を行う。

調査資料は、明治安田生命保険相互会社が毎年行っている「生まれ年別の名前調査」（以下、明治安田の「年別名前調査」と略称する。）と、(株)ベネッセコ・ポレーションが毎年実施している、たまひよの「名前ランキング」（以下、たまひよ調査と略称する。）を用いることとする<sup>2</sup>。

なお、本研究においては、常用漢字と戸籍法施行規則が定める人名用漢字を合わせた、広義の人名用漢字を考察対象とする。また、常用漢字の最近の改定は2010年11月30日に行われているが、本研究で用いた資料の最新の調査結果の調査時期が2009年12月であるため、2009年12月を本研究の基点とする。

---

<sup>1</sup> 1989年から毎年実施されている明治安田生命保険相互会社の「生まれ年別の名前調査」においては、2007年以降、トピックスで「個性的な名前」が取り上げられるようになった。

<sup>2</sup> 節により必要なデータが異なるため、明治安田とたまひよの両者の調査結果を用いる。2節、5節では明治安田の「年別名前調査」を、3節、4節では、漢字と読みの両者の情報が必要であるため、それらが記載されているたまひよ調査を分析に用いた。

## 2. 名前に使用される漢字の字種の変遷

ここでは、近年、個性的な名前の子どもの増加していると感じる要因に、名づけに使用される漢字そのものの変化があるのではないかと考え、使用漢字の字種に注目して、その変遷を考察する。調査は、明治安田の「年別名前調査」における「生まれ年別名前ベスト10」について、1965年から2009年までの約50年間を対象として行う。

### 2.1 分析方法

この「生まれ年別名前ベスト10」は、1912年から2010年まで、過去99年分が調査結果としてまとめられている。その中、本研究では、1965年から2009年までの調査結果を分析対象とする。1965年からを対象としたのは、本研究の目的が近年の個性的な名前の増加要因を探ることにあり、100年前まで遡って分析する必要はないと判断したためである。

分析方法は、1965年から2009年までを10年単位で区切り、名前ベスト10に使用されている漢字について、年代ごとに5年間のデータ<sup>3</sup>を対象とし、それぞれの漢字の使用回数と使用例(=名前)の集計を行う。

### 2.2 漢字の字種に関する傾向

男児の名前と女児の名前に使われた漢字の字種について、その異なり字数と延べ字数、その年代になり初めて名前に使われるようになった新出漢字数を表にまとめると、以下のようになる。

表1 名前の字種の変遷：男児

男児	60年代	70年代	80年代	90年代	2000年代
異なり字数	19	21	18	29	23
延べ字数	71	75	90	91	91
新出漢字数		11	5	15	9

表2 名前の字種の変遷：女児<sup>4</sup>

女児	60年代	70年代	80年代	90年代	2000年代
異なり字数	13	18	18	31	24
延べ字数	114	103	77	89	93
新出漢字数		8	9	20	9

男女共に、網掛けをした80年代、90年代で名づけの傾向が大きく変化していることがわかる。80年代では延べ字数が、90年代では異なり字数と新出漢字数が変化している。前者については、男児で増加、女児で減少している。このことは、男児では漢字一字の名前から二字以上の名前へ、女児では漢字三字の名前から一字、または二字の名前へと、名づけの傾向が変化したことを示し

<sup>3</sup> 本研究で扱う最新のデータが2009年のものであるため、60年代は1965～69年、70年代は1975～79年、80年代は1985～89年、90年代は1995～99年、2000年代は2005～09年の各5年を対象としている。

<sup>4</sup> 本節では、漢字の字種に注目して考察を行うため、女児の名前に登場した平仮名の名前は除外している。

ている。異なり字数と新出漢字数については、男女共に増加しており、使用される漢字の種類が増加したことで、名前の多様化が進んだことがわかる。

また、名前に使用される漢字の種類が増加したことで、近年のベスト10では、「拓也」と「拓哉」、「大樹」と「大輝」のように、同じ「音」でも異なる漢字を当てる名前が見られるようになった。さらに、「海斗」と「拓海」、「翔」と「大翔」のように、同じ漢字を使用していても漢字の読み方が異なる名前も数多く登場するようになり、上下の漢字の組み合わせといった漢字の使用法にも変化が見られるようになっている。

### 3 . 漢字と読みの相関について

本節では、名づけに使用される漢字の読みの多様化が、個性的な名前が増加していると感じる要因ではないかという観点から、名前に使用された漢字一字ずつに対し、どのような読みが当てられているのかについて分析する。調査は、たまひよ調査の2005年から2009年までの上位100位を対象として行う。

#### 3 .1 分析方法

分析方法は、まず、過去5年間のランキング男女上位100位に登場する漢字すべてに対し、3冊の漢字辞典<sup>5</sup>と名づけ本<sup>6</sup>を用いて、どのような読み方が掲載されているのかを調査する。その後、実際のランキングで使用された漢字の読み方を、以下に示す A から Fiii の分類に当てはめ、名前に使用される漢字の読み方について、どのような傾向が見られるのかを考察した。

##### 《名前の読み方の分類》

- A：常用漢字の音訓表に入っている
- B：一般的な漢字辞典で音訓が記載されている
- C：一般的な漢字辞典で人名の読みに記載されている
- D：名づけ本で人名の読みに記載されている
- E：A～D、F に該当しない読みをあてたもの
- F i：一般的に熟字訓として知られている 例) 大和(やまと) など
- F ii：熟字訓をアレンジしたもの 例) 日向 陽向(ひなた、ひゅうが) など
- F iii：漢字の意味やイメージから自由に創作したもの 例) 蒼空(そら)、歩夢(あゆむ) など

<sup>5</sup> 漢字辞典は、以下の3冊を参考にした。

- ・『日本語漢字辞典3版』新潮社編 2007年 新潮社
- ・『現代漢和辞典初版』木村秀次・黒澤弘光編 1996年 大修館
- ・『必携漢和辞典初版』小川環樹・尾崎雄二郎・都留春雄編 1996年 角川書店

<sup>6</sup> 名づけ本は、以下の3冊を参考にした。

- ・『赤ちゃんの名づけ辞典』2005年 小学館
- ・『男の子・女の子 赤ちゃんの名前事典』2010年 新星出版社
- ・『男の子・女の子 幸せになる 名前の事典』2010年 成美堂出版

漢字一字ずつを対象とするA～Eのうち、Aは常用漢字の音訓として内閣訓令で認められている読みであり、その漢字との結びつきが最も強いものである。B、Cと進むにつれて、その漢字と読みの結びつきが弱くなり、Eは一般的にはその漢字の読みとして認められていない、かなり難読の読みだといえる。

### 3.2 漢字の読み方に関する傾向

男女別・年別に、AからFiiiまでの分類の状況をまとめると、以下のようになる。

表3 名前の読み方の分類：男児

男児	A	B	C	D	E	F i	F ii	F iii	合計
2005	103	42	55	75	0	1	1	4	281
2006	100	47	58	78	2	1	1	3	290
2007	94	41	47	68	3	2	1	3	259
2008	91	42	51	67	2	1	1	3	258
2009	88	42	52	72	2	1	1	4	262
合計	476	214	263	360	9	6	5	17	1350
平均	95.2	42.8	52.6	72	1.8	1.2	1	3.4	270
割合	36%	16%	19%	27%	1%	0%	0%	1%	100%

表4 名前の読み方の分類：女児

女児	A	B	C	D	E	F i	F ii	F iii	合計
2005	89	50	101	126	7	2	0	1	376
2006	90	54	112	129	8	2	0	2	397
2007	86	51	103	123	8	2	0	2	375
2008	90	51	105	131	11	2	0	2	392
2009	83	52	98	126	11	1	1	1	373
合計	438	258	519	635	45	9	1	8	1913
平均	87.6	51.6	103.8	127	9	1.8	0.2	1.6	382.6
割合	23%	13%	28%	34%	2%	0%	0%	0%	100%

男女を比較すると、Aに分類される、常用漢字の音訓表に入っている読みをする漢字については、男児のほうが多いことがわかる。しかし、Cに分類される、漢字辞典で人名の読みに記載されている読みや、Dに分類される、名づけ本に記載されている読み、さらに、辞書や名づけ本に記載がないEの読み方をする漢字については、女児のほうが多い。このことから、男児の名前よりも女児の名前のほうが、ある漢字に対して自由に読みが与えられることが多く、その結果、個性的な名前が多くなっていることが読み取れる。

しかし、特殊な読み方をするFの熟字訓のiからiiiをまとめて割合を出すと、男児は2%、女児では0.9%となり、男児の割合のほうが高い。このことから、Fの分類にあたる名前が、男児の名前において、個性的な名前が増加してきたという印象を与えているのではないかと推測できる。

女児の名前についてみると、Dに分類される、名づけ本に記載されている読みの数が、毎年120

を超えている。このことから、両親が名づけ本を参考に、子どもの名前を考えているのではないかと推測できる。また、「心愛(ここあ)」や「寧々(ねね)」、「咲良(さら)」など、女兒の名前には「音」の響きの良い名前が多い。このことから、女兒の名前では、元来漢字に与えられた読みにこだわらず、漢字の字面から受ける印象とその発音に注目した「音ありき」の名づけが行われているのではないかと推測できる。

また、女兒の名前においては、「ひより」という「音」に対して、「日和」「ひより」と表記し、「ゆい」という「音」に対しては、「結衣」「優衣」「結」といった複数の漢字を当てていることが多かった。このことから、同じ読みであっても、平仮名や異なる漢字を当てることでそれぞれの名前に個性を出し、同じ「音」の名前に対して差別化を図ろうとしていることが窺える。

以上をまとめると、男児の名前については、漢字と読みの相関に関してあまり突出した特徴は見られないものの、Fに分類される熟字訓の読み方については、女兒よりも多くなされていることがわかった。

女兒の名前については、Aに分類される、常用漢字の音訓表に入っている読み方が少なく、逆に、Cに分類される、漢字辞典で人名の読みに記載されている読みや、Dに分類される、名づけ本に記載されている読み、さらに、辞書や名づけ本に記載がないEの読み方をする漢字が多かった。このことから、女兒の名前については、漢字に対して自由な読みを当てるという動きが起こっているといえる。

また、一字一音式の万葉仮名的用字の名前は、女兒に多く見られる。男児の名前では、調査した5年間を通して「琉生(るい)」「璃空(りく)」の2種類が登場したのみであるのに対し、女兒の名前では、「陽菜(ひな)」「美羽(みう)」が、毎年上位10位に登場している。また、年によっては上位10位の半数以上を占めるなど、女兒の名前は、万葉仮名的用字により、名前の読みを重視した「音ありき」の名づけがなされているといえる。

#### 4. 名前に使用される漢字の音訓のつながり

本節では、名づけに使用される漢字同士の結びつきが変化したことが、近年の個性的な名前の増加要因ではないかという観点から、名前に使用される漢字の音訓のつながりに注目して分析を行うこととする。調査は、前節に引き続き、たまひよ調査の2005年から2009年までの上位100位を対象として行う。

##### 4.1 分析方法

前節で行った、2005年から2009年までのたまひよ調査の分類結果を用い、実際のランキングで使用された漢字の読み方が、音読みであるのか、訓読みであるのかを調査した。その後、以下の①から⑦の7通りに分類し<sup>7</sup>、名前に使用される漢字の音訓のつながりについて、どのような傾

<sup>7</sup> 実際には、名前の字数が一字から三字、音が訓か、Eの読みをするかの組み合わせにより、合計20通りに区別できる。しかし、ここでは名前に使用される漢字のつながりが、どのように音訓が入り混じっているのかを、より明確にするため、それらを系統別に7分類した。

向が見られるのかを考察した。

《名前の音訓のつながりに関する分類》

- ①音読みのみをする漢字一字から三字の名前
- ②訓読みのみをする漢字一字から三字の名前
- ③重箱読みをする名前
- ④湯桶読みをする名前
- ⑤音訓の混じった漢字三字の名前
- ⑥Eの混じった漢字一字から三字の名前
- ⑦熟字訓の名前

4.2 漢字の音訓のつながりに関する傾向

下図は、①から⑦の7通りに分類した2005年から2009年までの過去5年分の名前を、男女別にまとめたものである。

図から、「①音読みのみをする漢字一字から三字の名前」と「②訓読みのみをする漢字一字から三字の名前」の割合が、男女で逆になっていることがわかる。男児では「①音読みのみをする漢字一字から三字の名前」が多く、女児では「②訓読みのみをする漢字一字から三字の名前」が多い。

一般的に、漢字よりも平仮名、音読みよりも訓読みの方がやわらかい印象を与えるため、女児の名前に訓読みや平仮名の名前が多くなっていると思われる。

また、女児では「①音読みのみをする漢字一字から三字の名前」と「②訓読みのみをする漢字一字から三字の名前」の合計は56%であるのに対し、男児では、その割合は66%と全体の約3分の2を占めている。このことから、漢字の前後のつながりの面から考えた場合、女児よりも男児の方が比較的読みやすい名前が多いといえる。さらに、前節において、男児の名前には常用漢字の音訓表に入っている読み方をする漢字が多いことが明らかになっているため、漢字と読みの相関という面から考えた場合でも、男児の名前の方が、比較的読みやすい名前が多い。

「③重箱読みをする名前」と「④湯桶読みをする名前」の両者を合わせた割合は、男児で26%、女児で29%であり、男女とも全体の4分の1以

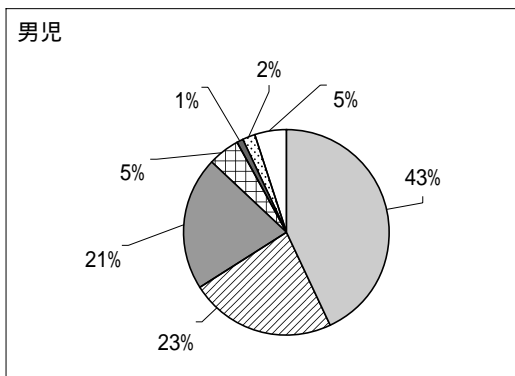


図1 音訓のつながりに関する分類：男児

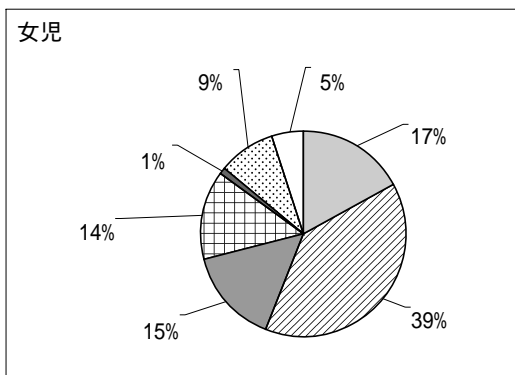


図2 音訓のつながりに関する分類：女児

上を占めている。「④湯桶読みをする名前」については、男児の割合は5%と低い、女児の割合は、男児の約3倍にあたる14%にものぼっている。

一般的な語における「湯桶読み」や「重箱読み」の割合は、たとえば小学館の『新選国語辞典第八版』<sup>8</sup>の収録語の場合、約7.4%であり、名前における男児26%、女児29%という割合がいかに高いかということがわかる。

「③重箱読みをする名前」と「④湯桶読みをする名前」に「⑤音訓の混じった漢字三字の名前」と「⑥Eの混じった漢字一字から三字の名前」まで含めた割合は、男児が29%、女児で39%と、両者の間に10%の差が見られた。前節の分析結果より、2005年から2009年までの5年間でEに分類された漢字が、男児では9種類であったのに対し、女児では5倍の45種類もあったことが明らかになっており、このことが、10%の差の要因であると思われる。

以上のことから、女児の名前の方が、音訓雑踏の名前が多いことが明らかになった。第3節において、女児の名前に個性的な名前が多いと述べたが、その要因は、第3節で明らかにした漢字と読みの相関についてだけでなく、本節で分析した漢字の前後のつながりについてもあるといえる。

## 5. 同一の「音」に対する表記の違い

本節では、名前の「音」に対する漢字表記の種類が多様化してきていることが、近年の個性的な名前の増加要因であるという観点から、同一の「音」の名前に使用される漢字の種類に注目して分析を行うこととする。調査は、明治安田の「年別名前調査」における「名前の読み方ベスト3」について、2006年から2009年までの4年間を対象として行う。

### 5.1 分析方法

分析方法は、まず、過去4年間のベスト3の名前にどのような漢字が当てられているのかをすべて調査する。その後、どのような「音」の名前が登場し、一つの「音」に対して何種類の表記法があるのかを分析することで、同一の「音」に対し表記の種類が複数ある名前について考察する。

### 5.2 表記の種類が複数ある名前の傾向

次表は、男女別・年別に、明治安田の「年別名前調査」における「名前の読み方ベスト3」をまとめたものである。

対象とする4年間で名前の「音」がまったく重複することはないと仮定すると、本来は12種類の名前の「音」が存在することとなる。しかし、実際には男児で4種類、女児で7種類の名前しか登場していない。このことは、特に、男児において、人気のある名前の「音」がある程度定着していることを示している。

<sup>8</sup> 『新選国語辞典第八版』 金田一京助、佐伯梅友、大石初太郎、野村雅昭編 2002年 小学館



表5 名前の読み方ベスト3：男児

男児	2006年	2007年	2008年	2009年
1位	ハルト (41種・111人)	ユウト (36種・93人)	ユウト (46種・122人)	ハルト (51種・107人)
2位	ユウト (39種・85人)	ユウキ (40種・87人)	ハルト (38種・92人)	ユウト (38種・94人)
3位	コウキ (48種・74人)	ハルト (41種・86人)	ユウキ (44種・80人)	ユウキ (39種・65人)

表6 名前の読み方ベスト3：女児

女児	2006年	2007年	2008年	2009年
1位	ハルカ (30種・74人)	ユイ (17種・72人)	ユイ (22種・82人)	ユナ (37種・72人)
2位	ミユ (23種・57人)	ユナ (34種・72人)	ミユ (23種・63人)	メイ (24種・64人)
3位	モモカ (20種・54人)	ハルカ (24種・52人)	メイ (23種・62人)	ミオ (22種・59人)

続いて、名前の表記の種類に注目する。男女別に平均値を出すと、一つの名前の「音」に対して、男児では約43種類、女児では約24種類であった。つまり、名前の表記の種類は、男児のほうが女児より約1.8倍多いことになる。

以上のことから、同一の「音」の名前に対し、複数の表記がある名前の傾向として明らかになったのは以下の2点である。

男児の名づけにおいては、多く名づけられる人気の「音」が存在している。そのため、同一の「音」に対し、複数の異なる漢字を当てる、前後の漢字の組み合わせを工夫するなどすることで、表記に個性を出している。そして、そのように表記を工夫することが、近年の個性的な名前の増加要因につながっている。

女児の名づけにおいては、「名前の読み方ベスト3」において、2年以上同一の名前の「音」が登場していないことからわかるように、名前の「音」に関して、個性を出そうという傾向が強い。このことは、第3節で明らかにしたように、女児の名づけが、「音」にこだわってなされる場合が多いことによると思われる。

つまり、男児の名づけにおいては、同一の「音」であっても表記の仕方を工夫することで多様性を出すのが、女児の名づけにおいては、同一の「音」そのものを避ける傾向にあり、さらに、平仮名を用いるなど、表記の仕方を工夫することで、二段階で名前の多様化が進んでいるといえる。

## 6. おわりに

本研究では、はじめに述べた①～④の仮説をもとに、近年の個性的な名前の増加要因について分析を行ってきた。その結果、男児については、仮説の①と④に関する変化が、個性的な名前の増加に大きな影響を与えていることが判明した。つまり、名づけに使用される漢字の字種が増

加したこと、同一の「音」の名前であっても、表記の仕方を工夫することで多様性を出すようになったことが、男児における個性的な名前の増加要因であるといえる。

また、女兒については、特に②と④に関する変化が、個性的な名前の増加に大きな影響を与えていることが明らかになった。つまり、女兒には、辞書や名づけ本に記載がないEの読み方をする漢字が多く、ある漢字に対して自由に読みが与えられていること、また、万葉仮名的用字により、名前の読みを重視した「音ありき」の名づけがなされていること、さらに、湯桶読みをする名前の割合が男児の約3倍多いなど、音訓雑踏の名前が多いことが、女兒における個性的な名前の増加要因であるといえる。

以上の分析結果から、ある漢字が元来有していた読み方にこだわらず、個人が創作した読みを含め、自由に読みを当てはめるようになったこと、また、それらの読み方をする漢字を自由に組み合わせる名前を表記することが、近年の個性的な名づけの増加要因であると結論付けることができる。

このような名づけの傾向の変化は、戦後、漢字の使用を制限する方向で動いてきた国語政策が、近年、新たに常用漢字表を制定し、その規制を緩めるようになったことと軌を一にする変化であると捉えられる。

1947年、戸籍法の改正により、当用漢字1,850字のみを名づけに使用することが定められた。しかし、「より多くの漢字を名づけに使用したい」という国民からの不満や要望は多く、そのような世論を反映する形で、人名用漢字が制定され、その後も人名用漢字数を増やす方向で、国語政策は動いてきた。人名用漢字は、2004年に大幅な改定が行われ、2009年12月現在、名前に使用できる狭義の人名用漢字の数は985字である。当用漢字については、1981年に新たに常用漢字表1,945字が制定され、2010年11月には、約30年ぶりの改定により、新たに2,136字が常用漢字として名づけに使用できるようになっている。

以上のように、戦後の漢字政策は、漢字の使用そのものをなくそうという方向から、名づけに使用できる漢字については規制を緩和する、そして、ついには、日常で使用する漢字についても、規制を緩和するという方向で動いてきたのである。2010年11月に行われた常用漢字の改定において、訓読みが新たに増やされたことなどにより、今後さらなる漢字の読みの自由化が進む可能性が考えられる。

## 参考文献

- 円満字二郎 2005 『人名用漢字の戦後史』 岩波新書  
 月間しにか編集部 2003 『人名用漢字』の基礎知識』 『月間しにか』 14 - 7 大修館書店  
 佐藤稔 2007 『読みにくい名前はなぜ増えたか』 吉川弘文館  
 牧野恭仁雄 2003 「人名用漢字・歴史と事件 制限と規制緩和」 『月間しにか』 14 - 7 大修館書店

## 参考サイト一覧

- 明治安田生命の生まれ年別の名前調査 <http://www.meijiyasuda.co.jp/profile/etc/ranking/> 2011 / 02 / 04  
 たまひよの名づけ [http://women.benesse.ne.jp/tamahiyonaduke/naduke\\_index.html](http://women.benesse.ne.jp/tamahiyonaduke/naduke_index.html) 2011 / 02 / 04